http://decfamily.p1.bindsite.jp/2012/

We 15R

No.086　12/10/11

山中さん

ノーベル医学生理学賞受賞で一躍時の人となった山中さんについては、新聞やニュースで多くのことが報道されていて、みんなも「へぇ～」と思うことがいっぱいあることだろう。例えば私の印象に残った記事では、

＊

メスを持つ手は血まみれだった。神戸大医学部を卒業して研修医になったばかりの２５歳のころ。初めての手術だった。上手な医師なら１０分ほどで終わる良性腫瘍(しゅよう)の摘出が、１時間たっても終わらない。手術台の患者に謝った。「すまん」

患者は、中学からの親友、平田修一さん（50）だった。顔は布で覆われていたが、局部麻酔で声は聞こえる。「すまんて、どうゆうことや？　ほんま頼むで……」

山中さんは講演のたび、この時のことを話す。「とにかく手術が下手で。それで整形外科医になるのをあきらめました」。口の悪い先輩からは、邪魔ばかりで役立たずの「ジャマナカ」と呼ばれた。（朝日ﾃﾞｼﾞﾀﾙ、９日）

＊

といったものがある。みんなもこのエピソードは知っているかも知れない。

昨日（10日）は、NHKの「クローズアップ現代」に登場してインタビューに答えていたが、その中で印象的だったことが２つある。

一つは、iPSに関する研究が知られるになってからわずかの年月で、しかも山中さん自身若くしていらっしゃるのに受賞したことをどう思うか？と聞かれた時の答え。山中さんは、この研究の基礎となった研究を始めた自分の恩師の名を挙げた上で、すでに研究には50年近い伝統があること、そして、自分が受賞できたのは、その恩師の研究があってこそのことなのだと述べていた。単なる謙遜ではなく、学問に真剣に取り組む人間の魅力が感じられる答えであった。

もう一つは、特許取得を急いでいるのはなぜか？という質問に対する答え。一般に特許は、企業がそれを取得することによって自社の利益を確保しようとするわけだから、山中さんが特許取りに夢中になっているということは、自身の研究成果を独占するかのようなイメージがあるわけである。このことに対して山中さんは、自分たちが特許を申請を急いでいるのは、自分たち（京都大学）が特許をとることで、一部の企業に研究成果を独占されないようにするためであると述べていた。つまり、京都大学として特許を取得することで、逆にその研究成果を広く世界で共有できるようにしているというわけである。なるほど…。（京大の宣伝にもなるし…）

インタビューの中で、iPS細胞をつくることは、環境さえ整えば中学生・高校生にでもできる簡単なことなのだともおっしゃっていた。だから逆に開発競争が激化しており、そのような環境の中で、上述のような理由から特許を取得し続けるには、多額の資金が必要になるというわけだ。こういうことをバックアップする行政的（文科省）な努力も必要なのだろう。